二本松市女性防火クラブ　ヒアリング記録

日　時　　2011年9月9日（金）13:00～

場　所　　二本松市役所 会議室

参加者　　遠藤 瞳 さん　　（二本松市婦防前会長・前福島県婦防会長）
　　安藤 みちよ さん（現二本松市婦防会長、東和地区会長）
　　国分 キヨ さん　（市副会長、旧二本松地区会長）
　　大槻 友代 さん　（市副会長、岩代地区会長）
　　佐々木 文子 さん（市副会長、安達地区会長）

　　二本松市役所　生活環境課　渡辺主査

１．背景・概要

二本松市は福島県の北部、福島市と郡山市の中間にある、人口約6万4千人・約1万9千世帯のまちである。西部には安達太良山の山麓が、中央は阿武隈川を中心とした比較的平坦な地域が、東には阿武隈山地があり丘陵上の起伏のある地域が広がっている。東側は、太平洋側まで続く浪江町と接している。東北自動車道と東北本線が市内を貫いており、交通の便にも恵まれている。

平成17年12月1日に二本松市・安達町・岩代町・東和町の4市町で合併しており、各地区の婦人防火クラブがともに二本松市婦人防火クラブを構成している。

東日本大震災における二本松市内の被害は、他と比較すると特に大きいとはいえないが、それでも全壊10棟、大規模半壊36棟　半壊300棟の被害が出ている。

震災から4日目、隣接する浪江町から、原発の影響を逃れるために避難してきた約4千人の被災者の方たちがこの二本松市内に移動してきたことから、二本松市婦人防火クラブでは、避難所における炊き出しのほか、支援が届きにくい、空き家や親せき・知人宅などに身を寄せた被災者の方たちへの個別の物資提供という、難しい活動をやり遂げている。

また、現在市内9～10箇所くらいに約900戸の仮設住宅が建っているおり、スーパーの移動販売が回ったり、浪江町が小学校と中学校に通う子どもたちのためにスクールバスを出すなどして、生活が支えられている。今後こうした仮設住宅に暮らす人たちと二本松市民との交流の在り方が課題となっていくことが予測されるが、地域の防火啓発活動などを通じて、自然体の交流ができれば、と考えている地域もある。

２．詳細

①各地区の状況

■旧二本松地区　（国分 キヨ）

旧二本松地区はさらに6地区に分かれており、3月15日から5つの地区で被災者の受け入れを行った。体育館をジェットヒーターで暖めるなどして200人を受け入れをした地域では、五升炊きの釜二つで30キロのお米をたいて食事を用意し、翌日からはお昼のお味噌汁を約2週間提供しつづけた。日曜日にはイカ焼きや焼肉、焼きそばなどで楽しんでいただいた。女性防火クラブで５升炊きの釜をひとつと、地元でも水害が時々あるため保有していた５升炊きの釜の、二つを使った。食器はおにぎりなので要らなかったが、足りない湯飲みは住民センターから借りた。

また、大平地区は社協もあるので、ボランティアも入って支援が行われたが、避難者の方自身にも手伝ってもらうようにして一緒に用意をした食材は地域に農家が多いのでみなで持ち寄ってまかなった

仮設住宅は5月下旬から完成し始め、6月下旬から入居が始まったが、不便なところは埋まっていない。

■安達地区　（佐々木 文子）

地震の被害はあまり大きくなく、屋根が壊れたり、一人暮らしで不安といった人たちが公民館に避難してきたような状況であった。

婦人防火クラブでは、一人ぐらしの高齢者の方の安否確認を行って回った。スーパーで買い物もできず、おかずがなくなっているような家もあったので、おすそ分けなども行った

浪江町からの被災者に関しては、原発事故後すぐに避難してきた人たちはいなかったが、現在、地区内に240戸の仮設住宅が建設されており、そのうち180～190世帯ぐらいが入居しているようだ。近くにスーパーもあり、仮設住宅の生活環境としては悪いほうではないと思う。ただ、集会施設はどこもあるものの、自治会もまだ立ち上がっておらず、消防団なども機能していないようだ。

また、子どもたちが荒れないかや、よいコミュニケーションをとっていけるかなど、やや不安な面もあり、何かできればと考えている。仮設住宅に防火のよびかけチラシをつくって配布しようかと思っている

■岩城地区　（大槻 友代）

岩代地区には、2箇所の避難所が仮設され、200人規模と50人規模で受け入れを行った。50人規模の方では浪江町の方たち自身で炊飯を行っていたので、200人規模の方にボランティアや赤十字奉仕団が入って炊き出しを行った

■東和地区　（安藤 みちよ）

東和地区でははじめ、浪江町の方たちが体育館と健康センターに避難してきたが、職員よりも先に住民が到着してしまい、避難先の割り振りなどに苦慮した。最終的に4つの住民センターに分けて入ってもらった。

炊き出しの支援を申し出たが、物資が午後9時にならないと入ってこないので、今はなにもできない状態だ、といって要請はなかった。

浪江役場が一時、役所機能を東和支所に置いたが、住民はその後、二次避難として、猪苗代湖や岳温泉など、条件のよいところへ移っていく人も多かった。

避難準備のため廃校を掃除してほしいと地区に対する依頼があり、地区役員はじめ皆で掃除

したものの、避難所とならなかったということもあった
　いずれにしてもみなさんは、浪江で被災し、対馬、すぐに東和へといった形で、混乱の中避難してきたので精神的にかなりきびしかったようだ。

②全般（婦防全体としての活動や個別課題など）

■二本松市婦人防火クラブとして（安藤 みちよ）

　防火クラブとしては、3月18日ごろから各地区と電話で連絡をとりあい始めたが、4月に入って、日本防火協会から支援物資が届くことになったため、支援がなかなか届いていない、避難所以外の賃貸住宅や親族・知人宅へ避難している方たちの支援をすることを決めた。電話で各地区に連絡をして、各支部の皆さんが被災者の方がどこにいるのかの、把握を行った。取り組みの際には、消防本部、市役所にも支援計画を伝えて行動に移していった。
　所在の把握には各地区の役員のみなさんにたいへんな協力をいただき、最終的には約170世帯に物資をお届けすることができた。在宅避難者は、浪江町と隣接する岩代地区が一番多く、半日かけて各世帯を回った。物資不足の中で、どのお宅でも大変よろこばれた。クラブ員の中には、物資がそろわないからといって、自ら多少買い足して配った人もいた。ガソリンも4月下旬まで不足気味の状況だったため、苦労しながら活動した。
　浪江町とは地域的に隣接しているため、親族、空き家、アパート、知人の紹介などで、移動してきた人が多く、着の身着のままで夜中に避難を開始して逃げてきている。そのため、一ヶ月以上暖かいものを食べていなかったという家族もいた。例を挙げると、1つの家に6・7人で避難している方たちがいて、そのお宅でラーメンを作って差し上げるとたいへん喜ばれた。ペットがいて避難所には入れない、という方も結構多かった。
　また、ＪＩＣＡの研修センターが市内にあるが、そこに200人ぐらい避難していたため、そこで職人が行うラーメンの炊き出しのお手伝いもした。

■地域における組織の立場

　以下のような意見があり、地域における他団体との関係性が浮き彫りになった。
・支部で要請があれば支援をと思っていたが要請がなく活動しなかった。
・自分の地区では、婦人会にのみ支援要請があったため、自分たちは活動できなかった経緯がある。地区内で、今後はお声がけいただければと申し入れした。社会福祉協議会のもとで、女性防火クラブも各種団体の輪の中に入っているので、今後もできることをやっていきたい。
・法被を持ち、心構えもあるのに、要請もなく何もできないと、これでよいのかとつらくなってしまう。
・二本松市の防災会議には、婦防の会長が出席しているが、市内の主たる女性団体で構成している「各種女性団体連絡協議会」には入れてもらえていないので、どうしても情報や連携から漏れる傾向にある。
・ただ、各地区における、各種団体の代表による会合に参加することがあっても、漠然と総会をやって終わる感じである。

■運営・活動の様子

・防火クラブは行政からは独立しており、会員も自分の地域では、交替でいろいろな人がなる

が、できるだけ幅広い方たちに経験してもらえると良いと考えている。
・安達地区では、高齢の会員もいるが、20代、30代、40代のひともいる。会費は年間200円で、安達支所のかたがサポートはしてくれているが､お金の管理は基本的に自分たちで行っている。会員は地区ごとに順番で担当が回ってくる形となっている。
・東和地区は4地区30行政区からなるが、班長が4人×4地区の、16人で活動している。

３．今後に向けてとメッセージ

■分析

○今回、婦人防火クラブとして体制を整えているものの、他の日本赤十字社の地域奉仕団（地域婦人会が構成団体となっている場合が多い）にのみ要請がいくなど、十分に活動ができなかったという背景もある。他市町では婦人防火クラブが活躍した例もあり、日常からの他団体との関係性について、さらに検討をしていく必要があろう。
　具体的には、各種女性団体協議会等の組織との連携や、社会福祉協議会・ボランティアセンター関係団体と、日常から関わりを持てるよう、行政の協力も得ながらネットワークを広げておくことがポイントとなろう。

○一方で､集団的避難施設における炊き出しなどは､調整がつけばやりやすいのも現実である。今回のように、婦人防火クラブだからこそできたと考えられる事例や（個別世帯への迅速な支援）、消防署との連携という信頼をバックにした、防火啓発をテーマにした個別世帯へのアプローチが可能など、クラブの特性を生かした活動を活発化させていくことも重要であろう。

○たとえば、このたび地域内に新たに誕生した仮設住宅は、いろいろな場所に建っており、元のコミュニティを維持しようと思っても難しいのが現実なのではいかと推察されている。二本松市民と仮設住宅コミュニティとが、近隣関係の中で自然体のよい関わりができないかと模索する地区婦人防火クラブもあるが、防火活動などのなじみやすい、消防との連携のもとで展開できる活動は、そのきっかけづくりとしては理解が得られやすいであろう。

■メッセージ

○日本防火協会からの支援はたいへんありがたかった。全国の婦防の皆さまの心遣いにも感謝しています。

○静岡県の婦人防火クラブからは直接物資の提供があったため、地域の支援につなげたが、5月の連休にはその静岡の会長さんが当地を訪ねて励ましてくださった。こうした全国のつながりが本当に心強かった。

○今回防火協会のおかげで物資も届き、会員の力で支援もできた。地域の日ごろからの連携が生きた。

○みそ・しょうゆ・米が大切ということをつくづく実感した

（以上）